

一番大切なことは

三月十一日金曜日、大きな地震がありました。教室は大きな横ゆれで、机の下にもぐっていても、その机がゆれるほどでした。友達の中にはこわくて泣いている子や、はいた子もいました。

わたしはこわいと思うよりも、びっくりしたという気持ちがずっとあって、そのあと家がくずれていないか心配になりました。

机の下で、近くの友達とゆれがおさまるまでずっとはげまし合っていました。校舎がこわれる寸前のような音を立てたときは、ドキドキしました。

地震が起きてから三十分後くらいに、校庭にひなんすることになりました。友達のお父さんやお母さんが次々に迎えに来て、校庭にいた児童の数はどんどん減っていききました。わたしのお父さん、お母さんはなかなか来ませんでした。とても不安でした。夕方暗くなる少し前に、お父さんがやっと迎えに来ました。

夜になってもお母さんは帰って来ませんでした。お父さんとわたしは、余震が来るたびにろうそくと石油ストーブを消し、かいちゅう電灯を持って外へ出ます。そしておさまるとまた中へもどる、のくり返しです。ある程度おさまったときに、二人でカップ焼きそばとカップラーメンを食べました。

外はあかりが全部消えていたのであたりは真っ暗で、うっすら雪が積もっていました。わたしが、

「お母さんがすぐにあたたかいものが飲めるようにしよう。」
と言うと、

「おお、それはいい。お母さん、きっと喜ぶぞ。」

と、お父さんも賛成してくれました。
お父さんと車の中で待っていると、午後十一時ごろ、やっとお母さんが帰ってきました。お父さんが、

「お母さんのために、ひろみがお湯を準備してくれたんだよ。」
と言って、お母さんにお茶をいれてあげました。

お母さんは、
「うれしい、あったまる。ひろみ、お父さん、ありがとう。」

と、初めてほっとしたように笑ってくれました。
その晩はいつもとちがうせまい部屋で、三人でくっつきあって寝ました。時々余震が来てガタガタ音がしましたが、お母さんとお父さんの真ん中で、とてもあたたかかったです。

(太白区 四年生児童作文から)

【考えてみましょう】

- 「わたし」はどんな気持ちでお母さんにお湯を準備してあげたのでしょうか。
- あなたが今、家族のためにできることはどんなことでしょうか。



一番大切なことは